人喰いヴァンパイア

激しい凌辱の後に貪り喰われる美女達

作者　大黒達也

人喰いヴァンパイア

『あらすじ』

ヨーロッパの大学に留学中であった女子大生の飯田花梨は、謎の美女に拉致され、ルオマニア奥地の古城に連れ込まれる。そこでは、邪悪な吸血鬼達が、誘拐した美少女達の血肉を貪っていた。

花梨の家族から、捜索の依頼を受けた龍一は、単身で花梨の救出に向かう。

『登場人物』

黒沢（くろさわ）　龍一（りゅういち）

ヴァンパイアの超人的能力を与えられた少年。寡黙でクールな反面、心の奥底に激情を秘めている。

黒沢（くろさわ）　修（おさむ）

龍一の叔父。ヴァンパイアウィルスの投与を受け、末期癌を克服する。甥の龍一を愛し、影で支え続ける。

シャロン・キンバリー

修の恋人。燃え上がるような金髪の美女。交通警官であった頃に事故で瀕死の重傷を負い、修により命を救われた。

飯田（いいだ）　花梨（かりん）

年齢十九歳。女子大生でミスキャンパスに選ばれるほどの美少女。ヨーロッパ旅行中にヴァンパイアにより拉致される。

江藤（えとう）　美咲（みさき）

高校の英語教師。モデルといっても通用する美貌の持ち主。暴力団によって拉致され、陵辱の限りを受けるが、龍一によって救い出される。

ピータ

若い女に性的凌辱を加え、最後には生きたままその肉を貪り喰らう凶暴な狼男。

アナコンダ

身長三メートル、体重一トンの大女。巨大な口で若くて美しい女を丸呑みにするモンスター。

『目次』

プロローグ
第一章　古城

第二章　性交奴隷
第三章　刺客
第四章　モンスター
第五章　美少女の串刺し
第六章　最強の老女
第七章　犯される美女ヴァンパイア
第八章　地獄の花嫁
エピローグ

『本編』

プロローグ

二〇一九年六月。場所はルーマニアのトランシルベニア地方に位置する森林地帯。

時刻は十九時を過ぎたばかりだ。西の空には、血のように赤く巨大な満月が煌々と輝いていた。

深い森を切り裂くようにして造られた林道を、ひとりの若い男が歩いていた。

年の頃は二十歳を過ぎたばかりであろうか。彫りの深い顔立ちに鋭い眼差しを持つ青年であった。肌の色から東洋人に見える。黒革のコートにジーンズという井出達で、長さ一メートル以上ある皮袋を背負っていた。

周囲は、オオカミや熊等野獣の気配に満ちているが、彼はまったく恐怖を感じていないようだ。

曲がり角を進んでいるとき、五メートルほど正面に大きな影が見えた。それは低い唸り声を上げながら、立ち上がった。体長三メートル近くもある成獣のヒグマであった。

青年は、驚いた様子も無く、平然と構えていた。

「俺に何か用か？」

穏やかな口調でヒグマに語りかけた。ヒグマは、なおも低い唸り声をあげながら、青年の前に立ち塞がっていた。

「これから大事な用事があるんだよ。悪いけど、お前と

遊んでいる暇は無いんだ」

驚いたことに青年は、ヒグマの横を悠然と歩いていく。ヒグマは、巨大な頭部を青年に向けて動かすだけで、攻撃しようとはしなかった。ヒグマはその場に蹲り、前足を舐め始めた。立ち去っていく青年の後姿をちらっと見詰めてから、深い森の中に消えた。

それから林道を数キロほど進んだ時、不意に青年は立ち止まった。青年の穏やかな瞳が、爛々と赤く輝きだした。十メートル程、進んだ林道の中央に若い全裸の女が立っていた。燃え上がるような金髪の女は、青年の顔を見詰め、形のいい上唇を舐め回しながら、淫らな笑みを浮かべていた。

「こっちにおいで。美しい男」

女は片手を上げて男を誘った。血のように赤い満月の光が、女の美しい裸身を浮き上がらせている。

「伯爵の城は、後どれくらいだ？」

女の顔に一瞬、困惑の色が広がった。生暖かい風が二人の間を通り抜けた。女の裸身が一瞬で青年の身体に張り付いていた。

「下らない話は止めて、アタイと遊ばない？」

女の舌が青年の首筋を這い回った。青年は、表情一つ変えはしなかった。女はその場にしゃがみこみ、ズボンのファスナーを下ろし始めた。

「ここは正直ね」

淫らな笑みを浮かべて青年の顔を見上げた。

白魚のような手で男根を掴みだし、数回擦りあげてから、呑み込んだ。淫らな音を立てて口腔性交を始めた。

青年は歯を食い縛り、射精を堪えていた。

女の燃え上がるような金髪を掴み、口腔性交を止めさ

せ、手で四つん這いにさせた。屹立した男根で背後から貫いた。女の豊かな乳房を鷲掴みにしながら、激しい勢いで腰を前後に降り始めた。女は気持ちがいいのか、金髪を振り乱し、喘ぎ始めた。

青年が逝く瞬間に女も果てた。ふたりは少しの間、余韻に浸っていた。不意に女の瞳が真赤に燃え上がった。青年はその瞬間を見逃さなかった。

女の首に腕を回し、一気に頚骨を圧し折った。驚くべきことに首を圧し折られても女は死ななかった。首が折れ曲がったまま、悪鬼のような表情で鋭い犬歯をむき出しにして、青年の首を絞めようと両手を伸ばしてきた。青年が胸のフォルダーから、レイジングブル四五四カスールを取り出し、女の口に突っ込み引き金を引いた。爆音とともに女の後頭部が吹き飛んだ。

青年は、コートのポケットから透明な液体が満たされた小瓶を取り出し、死体に注ぎかけライターで火を付け

た。可燃性の液体なのか、死体は一気に燃え上がった。

死体が燃え尽きるのを確認してから、針葉樹林が密生する森に踏み込んだ。

十メートルほど進んでから足を止めた。森の中にできた広さ十畳ほどの草地に全裸の若い白人女が倒れていた。首筋は大きく切り裂かれ、右足が根本から切り取られ、既に絶命していた。腹部も縦に切り裂かれ、内臓が露出していた。

死体の近くには、女の衣服が散乱していた。ハイカーだったのだろうか。リュックや水筒も見つかった。

さらに焚き火の跡もあった。燃え滓の中には、女のものと思われる肉を剥ぎ取られた大腿骨が無造作な感じで、転がっていた。

青年は、死体の前に膝間付いて少しの間、黙祷してから、先ほどの小瓶を取り出し、死体に透明な液体を注ぎかけ、ライターで火を付けた。燃え上がる炎をじっと見

詰めていた。

第一章　古城

そこは、針葉樹が生い茂る深い森の中に建てられた古城の地下室であった。

ひとりの若い東洋人女性が、全裸で簡易ベッドに仰向けの姿勢で横たわっていた。

暗い蝋燭の明かりが、女優と言っても通用するような女の美しい容姿を映し出していた。

素肌は雪のように白く、滑らかで溢れんばかりの若さが凝縮されていた。

その女の股間では、何か黒い物が蠢いていた。それは何者かの頭部であった。

それが動きを止めた。

「どうだい？女に犯られる気分は？」

若く美しい女の股間を舐めていたのは、同じくらいの年齢の若い女であった。こちらも先ほどの女に匹敵する程の美女であった。その女は真紅のチャイナドレスを着ていた。

「お願い。そんなことしないで……」

ベッドに横たえられていた女が、か細い声で懇願した。

「止めて欲しいだって！ここはこんなに濡れているよ」

チャイナドレスの女は簡易ベッドの下から、鋭利なナイフを取り出した。それで縛られている若い女の首筋をなぞった。女の表情が見る間に青ざめていく。女が淫らな笑みを浮かべながら、女をまるで子供を扱うように軽々と持ち上げ、簡易ベッドの上に、四つん這いの姿勢をとらせた。

シミひとつ無い美尻の背後から、極上の尻に両手を当てて股間を覗き込むようにしてから、舌なめずりをした。

「お前のきれいなアソコが丸見えだね」

ゆで卵のような滑々の尻を両手で押さえ込むようにして、尻の割れ目に顔を押し付け、焦らすようにアヌスを舐り始めた。

「お前のケツは最高の味だよ。このまま食ってしまいたいね」

「嫌！」

女は、豊かな黒髪を振り乱し号泣した。生暖かい舌がアヌスの中に侵入してきて肉癖を擦り上げた。意識とは裏腹に鋭い快感が背筋を走り抜けた。

チャイナドレスの女は、女の豊かな乳房を鷲掴みにして乳首を指先で摘みながら、アヌスを激しい勢いで吸った。それは内臓が吸い出される恐怖を感じるほど、激しいものであった。若い女の泣き声が、やがて小さな喘ぎ声に変わっていく。若い女に同性愛の趣向は無かったが、全裸でアヌスや膣を舐め回される快感に嫌悪感は薄れつつあった。

若い女のクリトリスを弄りながら、舌先を筒状に丸めてアヌスに突き刺した。女は、鋭い喘ぎ声を上げて全身を震わせ、簡易ベッドの上に突っ伏した。

チャイナドレスの女は巨大な張形を装着し、勝ち誇った顔で女の膣を一気に貫いた。

女は鋭い叫び語を上げて白い背筋を仰け反らせた。張形を装着した女は、女の黒髪を掴み自分の方に向かせて口に吸い付き舌を吸い出した。

女はあまりの快感に訳が分からなくなっていた。膣を犯され、舌を与えた。

女は一層激しく腰を若い女の盛り上がった白い尻に叩きつけた。

組み敷かれた女が、鋭い喘ぎ声を上げて、背筋を仰け反らせた。次の瞬間、全身を脱力させチャイナドレスの女の下に横たわった。

チャイナドレスの女は余韻を楽しむように少しの間、

脱力した女の膣を犯した。

数分後、女はベッドの上に仰向けで横たわっていた。チャイナドレスの女は、太腿の間から膣を覗き込み指先でクリトリスを弄っていた。

「お願い。もう許して……」

「生意気な口を聞くんじゃないよ！お前はアタイの肉に過ぎないんだ。夜は長い。何度でも逝かせてあげるよ」

女は、ぼんやりとした表情で、自分の膣を弄る女の顔を見つめた。

その女は、欲情に濡れた目で若い女の顔を見返し、舌で自分の唇を舐めた。

若い女の脳裏に先ほどの快感が蘇った。恐怖感は既になくなっていた。

上半身を起こしてチャイナドレスの女の頭を両手で掴んで、自分の膣に顔を押し付けた。

自ら膣を与え女の好きにさせた。すぐに激しい勢いで

吸われた。それだけで逝きそうになった。再び女の頭を手で押さえた。女の手を掴みベッドの上に仰向けになるように誘導した。チャイナドレスの女は嬉々とした表情で従った。

全裸の女は仰向けに寝たチャイナドレスの女の顔に跨り、膣口とアヌスを顔に押し付けるようにして腰を淫らに動かした。女が、アヌスに指を入れ直腸内をかき回してきた。若い女は好きにさせていた。膣口を激しく吸われ、アヌスを弄られて、気が狂いそうなほどの快感を得ていた。

女の柔らかい舌が膣に侵入してきて、内部を擦り上げた。電撃のような快感に意識が一瞬で吹き飛んだ。気を失って、女の顔に跨ったまま前のめりになり失禁した。

チャナドレスの女は、嬉々とした表情で小水を口で受けた。小水を飲み干してから、起き上がり、意識を失った女の盛り上がった白い尻に顔を埋めて、アヌスを舐り

始めた。

古城の地下室では、無数の蝋燭が苔むした石壁に虚ろな光を投げかけていた。

広さ百畳ほどもある部屋の中央には、長さ二メートル以上もある黒曜石で造られた石台が置かれ、その上には二十歳くらいの若くて美しい白人女性が全裸で横たえられていた。

女の股間には、皺だらけの醜い老人が、張り付き何かを啜っていた。

極上の容姿を持つ白人女は既に息をしていなかった。

老人が皺だらけの顔を上げた。

口元から真赤な鮮血が滴り落ちた。老人は舌先で口元の血を舐め、深い溜息を漏らした。

「若い女の血は、美味いのう」

独り言を言ってから、鋭い鉤爪で女の柔らかい腹部に突きたて、まるでチーズでも裂くような感じで、縦に切り裂いた。まだ、生暖かい腹腔に両手を差し入れ、血塗れの肝臓を取り出し、齧り付いた。鋭い犬歯で肉を噛み裂き、何度も租借してから呑み込んだ。

血のように赤い色をした巨大な満月が、切り立った絶壁の頂上に聳える苔むした古城を照らし出していた。先ほどの青年が、深い森の切れ目から古城を見上げていた。古城へと続く道は無く、目の前に立ち塞がる数百メートルの絶壁を登るしかない。

青年は不適な笑みを浮かべると、ヤモリのように壁に張り付き、両腕の力だけで、絶壁を登り始めた。数百メートルの絶壁を苦も無く登り詰めた。

目の前に黒々とした古城が浮き上がった。城のあちこちから薄暗い光が漏れていた。

正門は避けて、切り立った崖を両手の力だけで支えながら裏側に向かった。数十メートルほど進んだところで、岩が張り出した場所に着いた。そこには、縦横二メートルほどの横穴が穿たれていた。躊躇することなく、苔に覆われた洞窟内を進んだ。洞窟内には満月の光が僅かに差し込んでいるだけで、暗闇と変わらなかったが、しっかりとした足取りで進んでいく。まるで暗闇でも目が見えるようだ。

二十メートルほど進んだところで、行き止まりになっていた。青年はコートのポケットからペンシルライトを取り出し、前方を照らし出した。分厚い鋼鉄製の扉が行く手を塞いでいた。コートのポケットから透明な液体が入った小瓶を取り出した。小瓶の蓋を開け、鍵穴に透明な液体を注ぎこんだ。

強烈な酸の匂いがして、白煙が立ち込めた。片手で扉を押すと、音もなく開いた。

扉の先は苔むした岩肌が続く回廊だった。天井までの高さは五メートルほどもあった。

両壁には一定間隔で燭台が配置され、暗い蝋燭の炎がユラユラと揺らめいていた。

青年は背負っていた革袋を地面に下ろし、ジッパーを開けて中身を取り出した。

それは黒光りする銃器であった。対物ライフルのＸＭ五百。口径十二.七ミリ、重量十一Ｋｇ、装弾数十発でブルパップ式だ。威力は強力で人間の胴体を真っ二つに引き裂くほどだ。銃身を構えながらゆっくりと進みだした。青年の顔が緊張のためか、少し引き攣って見えた。苔むした回廊を数十メートル進んだところで、前方情報から光が漏れているのを確認した。足音を忍ばせ、ゆっくりと近づいていく。

見上げると、回廊の天井に一辺が二メートル四方の竪穴が空いていた。青年は銃の安全装置を外した。静寂の

中に無機質な機械音が響き渡った。

青年が五メートル上の竪穴に向けて垂直に飛び上がった。まるで重力を感じていないかのようだ。竪穴を通り抜け、穴の近くに着地した。周囲に銃口を向けて一回りした。

そこは岩盤がむき出しになった広さ百坪ほど空間だった。花崗岩でできた壁には、無数の燭台が作られ、ロウソクの妖しい炎が周囲を照らし出していた。また、壁にはいくつもの横穴が穿たれていた。青年は横穴を凝視した。内部に人の気配を感じ取っていたのだ。

構えていた銃を下ろし、ひとつの横穴に近つき、内部を覗き込んだ。横穴には鉄格子が嵌められていた。中には、簡易ベッドが置かれ、数名の若い女達が横たわっていた。女達の寝息が聞こえてきた。青年は銃を肩に担いて、鉄格子に両手をかけた。

太さ三センチはある鉄棒が見る間に撓んでいった。

自分が通り抜けられるだけ、鉄棒を曲げ、横穴に侵入した。眠っている女達の顔を覗き込んだ。皆、白人女性で若く美しい容姿をしていた。

その中の一人が、青年の気配を感じたのか、両目を開けて青年の顔を凝視した。美しい顔が恐怖に歪んでいた。青年は叫びだそうとする女の口元を掌で抑えた。

「俺は魔物ではない」

その女の耳元に顔を付けて英語で囁くように話しかけた。女がロウソクの微かな光に照らし出された青年の瞳をじっと見つめ、ゆっくりと頷いた。

「貴方は誰？私達を助けに来てくれたの？」

「魔物達は何人いる？」

青年は女の問には答えず、逆に質問した。

「二人よ。醜い老人と若い日本人の女だけ」

「奴らを倒せば、君達を助けたことになるのかな？そうだ。この女性を知らないか？」

青年は胸ポケットから一枚の写真を取り出し、女に見せた。

「知っているわ。三日ほど前に女が連れて行ったわ。知り合いなの？」

「彼女を助けに来たんだよ」

「もう手遅れかも知れないわ。奴らは人間の血を吸い、肉を食べるの。私達は奴らの食料として浚われて来たのよ」

「不死者と若い日本人の女か。奴らはどこにいるんだ？」

「いつもはあの扉の向こう側からやって来て、この中にいる誰かを連れて行くの。連れて行かれた人で戻った者はいないわ」

青年は、囚われの女達をその場に残し、女から聞いた扉を開けて中に入った。

光も無く、漆黒の闇の中を青年は進んでいく。手で触った感触では、岩石を削り、掘り進んだ回廊のようだった。まるで周囲が見えるかのように足取りは確かだった。百メートルほど通路を進んだ時、再び木製の扉に到達した。鍵は掛けられていなかった。周囲に気を配りながらゆっくりとドアを押しやった。

むせ返るような異臭が鼻を刺激した。足元に肉がこびり付いた人骨が散乱していた。

青年は何事も無かったかのように周囲を見渡した。

そこは広さ百坪ほどの空間で高さは十メートルは優にある岩盤を繰り抜いたホールのようだった。数千本と思われる燭台が岩壁一面に突き出し、蝋燭の怪しげな光が部屋全体を照らし出していた。

その時、目の前に上から何かが落ちてきて、どさりと音を立てた。

見ると全身を切り裂かれた白人女性の死体だった。女性は二十歳くらいで一糸も纏わず、美貌の持ち主だった。膣部や太腿や尻肉が鋭利なナイフで切り取られていた。片方の乳房も切り除かれ胸骨が見えていた。左脇腹が縦に切り裂かれ、心臓が取り出されていた。青年は女性の前で瞑目し、見開かれた瞳を指先を添えて閉じてあげた。

首筋には一対の小さな穴が開いていた。

青年は視線を女性の死体から岩壁に移した。見渡したが出口のようなものは無かった。天井に視線を向けると、縦横二メートルほどの穴が穿たれているのが見えた。

青年は不敵な笑みを浮かべ岩壁に張り付いた。ヤモリのような速度で岩壁を登り始めた。

すぐに天井の穴に到達した。その穴を潜り抜けると大理石で造られた巨大なホールに出た。

苔むした岩造りの回廊が目の前に続いていた。無数の火が付いた燭台が並び、縦横三メートルの回廊を百メートル程進むとT字路に差し掛かった。中央に立ち止まり、少しの間、聞き耳を立てた。右側に伸びた回廊から微かに気配を感じた。青年は足音を忍ばせ、右の回廊を進み始めた。数十メートル程進んだ時、木製の扉が見えた。鍵は掛けられていなかった。ノブを回しゆっくりと押し開いた。

第二章　性行奴隷

広さ三十畳ほどの部屋の中央には大型のベッドが置かれ、その上では真紅のチャイナドレスを着た女が、全裸の若い女を四つん這いにさせ、アヌスを音を立てて舐っていた。

「麗子……」

青年が上擦った声で女の名を呼んだ。

チャイナドレスを着た女が振り返り、悪鬼のような形相をして牙を剥いた。唸り声を発しながら垂直に飛び上がり高さ三メートルの天井に張り付いた。

「誰かと思えば、龍一かい。何しに来たのさ？それにね。麗子なんて古臭い名前は捨てたんだよ」

「どんな名前にしたんだ？」

「美咲さ。いかすだろう？」

美咲と名乗った女が、天井に張り付いたまま楽しみを奪われた怒りのために怨嗟の籠った視線を向けてきた。

「失せろ」

問いかけには答えず、レイジングブル四五四カスールを向けた。美咲は獣のような唸り声を発したかと思うと、天井をイモリのように這いながら部屋を縦断し出口から出て行った。龍一と呼ばれた青年は目で追うだけで引き金を引こうとはしなかった。

「花梨さんですね？」

龍一はベッドの上に横たわる女に毛布を掛けてやった。

「貴男は？」

「黒沢龍一です。お父様の依頼で助けに来ました」

花梨と呼ばれた女が毛布で豊かな胸を隠しながら起き上り、龍一と名乗る青年の全身を見詰めた。美しく逞しい青年であった。

その頃、若い女達が囚われている牢獄に黒い影が侵入した。牢獄の中央で黒いマントを羽織った皺だらけの顔をした老人が、周囲の女達をひとりづつゆっくりと見詰めていく。視線を向けられた女は一様にブルブルと震えだした。

老人は、女達の中でも一際美しい娘をじっと見詰めた。ゆっくりと歩み寄り、震えている女を片手で立たせた。

「知っているか？二十歳くらいの女の血が最も甘いことを。肉はとろけるほど柔らかく美味なことを」

老人が娘の盛り上がった白い尻を片手で摩りながら、耳元で囁くように言った。

「……」

女が全身を震わせ、嗚咽を漏らした。老人の顔を決して見ようとはしなかった。

老人は女を抱き上げ、牢獄を後にした。

数分後、城の一室では、老人が、金髪の女を犯していた。先ほど牢獄から連れて来られた女だった。木製のテーブルに横たえた雪のように白くシミひとつない女の太腿を押し広げ股間を舐めまわしていた。時折上を向いて淫らな笑みを浮かべ獣のような低い唸り声をあげた。

女は両手で顔を覆い、咽び泣いていた。

老人は女をうつ伏せに横たえ、盛り上がった白くむき

卵のような尻の割れ目に顔を入れてアヌスを舐め回した。女の咽び泣きが次第に喘ぎ声へと変わっていった。

老人がマントと黒服を脱ぎ捨てた。骸骨のように痩せ細り、皺だらけの身体で女の背中に張り付き、背後から貫いた。

女が鋭い喘ぎ声を上げて、背筋を仰け反らせた。老人は暫くの間、腰を前後させた。

女が全身を震わせ絶頂に達したとき、老人は獣のような唸り声を発し背後から女の首筋に噛み付いた。女の白い裸身が仰け反った。必死に逃れようとするが、朽ち木のような老人の手に羽交い絞めにされ、身動きが取れなかった。女の動きが次第に緩慢になり、やがて動かなくなった。

老人は女を逆さまに持ち上げ、股間を噛み裂き、ずるずると体液を啜りだしていく。

普段は死んだ魚のような目が、今は爛々と赤く燃え上

がっていた。

三十分後、老人は城の一階にある広さ百坪はある厨房にいた。先ほどの女の死体が、大理石で造られた調理台の上に載せられていた。

老人は、鼻歌を歌いながら、女の裸身を鋭い肉切り包丁で切断していく。むっちりとした長い太腿肉をまるでチーズのように切り裂いた。切り取った腿肉を一口大に切り火にかけた大鍋に放り込んだ。

盛り上がった尻に包丁を入れ、ステーキ大の肉を切り取った。塩コショウをまぶし、熱したフライパンで炒め始めた。すぐに胃腸を刺激する香ばしい匂いが厨房内に広がった。

「いい匂いね」

老人の背後には美咲が影のように立っていた。

「お前も食べるか？今日は久しぶりに料理を作ってみ

た」

「頂くわ。何だかお腹が空いてきたわ」

「もう少しだ。これでも食べておけ」

老人は白人女の腹部を包丁で切り裂き、血まみれの肝臓を取り出し、一口大の肉を切り取り美咲の口に入れてやった。

「美味しいわ。やはり若い女のレバーに限るわね」

その後、老人は、白人女の裸身を肉切り包丁のみで、バラバラに切断していった。

切り分けた肉に調味料で味付けを行ってから料理用の鍋やガスオーブンに入れて火を付けた。

残った肉は、ビニール袋に包んで、巨大な冷蔵庫に入れた。

美咲はその様子を赤ワインを飲みながら見ていた。

三十分後、厨房に隣接する食堂では、老人とチャイナ

ドレス姿の美咲が食事をしていた。
広大な室内の中央に置かれた食卓テーブルには、老人と美咲が向かい合って座っていた。
食卓テーブルには、先ほど老人が料理した白人女の肉料理が所狭しと並べられていた。
中央には死化粧が施された女の生首が皿に載せられ置かれていた。
「この尻肉ステーキ。柔らかくて最高に美味しいわよ」
美咲はナイフとフォークを優雅に使いステーキ肉を口に運んだ。
「まあまあだな。俺は花梨の尻肉を喰ってみたい」
老人は手掴みだった。鋭い犬歯で肉を噛み裂き、赤ワインをガブ飲みした。
「あの娘は私の物よ。それに今は龍一に匿われているわ」
「我が城で我が物顔に振舞うあの男は何者だ？」

「龍一のことを知りたいの？」
「当たり前だ。ここは俺の城だ。誰にも勝手はさせない」
「じゃあ。殺したらいいじゃない」
蔑むような笑みを浮かべた。
「奴は強い。これまで見た種族の中では最強だろう。俺は年老いた」
尻肉ステーキを噛み裂きながら、遠くを見るような目付きをした。
「貴方は種族の長老でしょう？何ビビッているの？」
「口の利き方に気を付けた方がいいぞ。俺は種族の女を喰らうのも好きなんだ。美咲。お前の尻も美味そうだな」
「いいわよ」
美咲は立ち上がり、老人の前に歩み寄った。チャイナドレスの裾を持ち上げた。パンティは履いていなかった。後ろ向きになって剥き卵のような尻を老人の顔に擦り付けた。

老人は深い尻の割れ目に顔を押し付け、美味しそうにアヌスを舐った。美咲をテーブルの上に仰向けに横たえ、再びアヌスを舐った。美咲は黒髪を振り乱し、嗚咽を漏らしながら老人の顔に尻を擦り付けた。

第三章　刺客

「随分と見せつけてくれるね」

「まったくだよ」

いつの間にか、ドアの前に黒革のロングコートを羽織った若い男とビアダルのような体型をした中年女が立っていた。ふたりとも驚くほどに背が高かった。三メートル近くはあるだろうか。女は背が高いだけではなく、数百キロの体重がありそうな肥満体型だった。

若い男は、五十口径のガトリングガンを、大女は一〇番口径の二連式ショットガンを背負っていた。

「お前達は何者なの？」

美咲の白い乳房がチャイナドレスからはみ出していた。

「いいんだ。彼らは私が呼んだのだよ」

老人は美咲をテーブルから下ろさせた。

「二人ともよく来てくれた」

「美女と大金のためだ。アンタの為じゃない」

「そうだよ。アタイは腹ペコなんだ。何ならその女を食わしてくれてもいいよ」

大女は醜く太った身体を揺らしながら笑った。

「ふざけんじゃないよ。お前なんかに喰われるものか！」

美咲は鋭い牙を剥き出しにして二人を威嚇した。

「俺は喰う前に存分に犯したいね」

美咲が低い唸り声を上げて若い男に飛びかかった。男は美咲の身体を軽々と受け止め、両足首を片手で掴み、逆さ吊りにした。剥き出しになった白い尻に頬摺りをし

た。ヴァンパイアの美咲を軽々とあしらう男は只者ではなかった。

「止めろ！変態野郎！」

「皆。いい加減にするんだ。お前達の目的はこれだろう？前金として取っておいてくれ。残金は奴を血祭りにあげてくれたら渡そう」

老人がテーブルの上に置いてあった革袋を二つを二人に投げ付けた。袋の中には眩い光を放つクルーガ金貨がぎっしりと詰まっていた。

「ピータは、ヴァンパイアが束でかかっても敵わない怪力の持ち主で、アナコンダも怪力ではピータと互角だ。その巨大な口で女を丸ごと喰らうんだよ」

老人は笑顔でピータの肩に担がれた美咲に説明した。

「爺さん。さっきも言ったけど腹ペコなんだ」

大女のアナコンダが金貨が詰まった革袋を背負っていたリュックに詰めながら言った。

「付いて来い」

ピータは、美咲を肩に担いだまま、大女は巨体を揺らしながら老人の後に続いた。

「下ろしてよ」

「いいじゃないか。ご老人は好きな女を与えると約束してくれたんだ。アンタは俺の好みなんだよ」

ピータは淫らな笑みを浮かべながら肩に担いだ美咲の太腿を舐めた。

「その女はワシの物だ。抱いていいが、食うては駄目だぞ」

「アタイだって、その姉ちゃんは、好みだね。味わいたいよ」

「そうか。味わうだけだぞ」

ピータは、あっさりとした感じで美咲のチャイナドレスを剥いで全裸にして、後ろにいた大女の大口に美咲の尻を落としこんだ。

「止めて！食べないで！」

先ほどまでの強気な感じは消し飛んでいた。圧倒的な力の差を感じていた。

大女は泣き叫ぶ美咲の尻を咥えながら歩いていく。大女の口内では、長い舌が美咲の股間を刺激していた。美咲の表情が変化した。最初は恐怖で震え戦いていたが、今は快感のあまり呆けた表情をしていた。アナコンダも口内に溢れる美咲の愛液を楽しんでいた。

黒沢は、花梨を腕に抱いて暗い回廊を進んでいた。花梨の全裸は真紅の毛布に包まれていた。あれ以来、チャイナドレスを着た女吸血鬼は姿を現さなかった。

これといった反撃は無かった。呆気ない感じだ。黒沢は他に囚われている女達を救いこの城を去るつもりだった。

「これからどうするの？」

黒沢の腕に抱かれた花梨が話しかけてきた。

「別の女達を救ってから、この城を出る」

「あいつに掴まるわ」

「老人のことか？」

「この城の主よ。千年は生きていると言う事よ」

「凄いね」

黒沢は不敵な笑みを浮かべた。

それから少し進んだところで、女達の絶叫が聞こえて来た。

黒沢は石畳の上に革ジャンパーを敷いてその上に花梨を座らせた。

「様子を見て来る。ここで待っていてくれ」

若く美しい女達が捕らえられていた洞窟前の広場で

は、ピータとアナコンダが女達をしたい放題に犯していた。ピータの長大な男根が、ひとりの女を背後から貫いていた。

近くではアナコンダが金髪の女を膝に抱いていた。アナコンダの長大な舌が女の膣口を貫き、内部を刺激していた。アナコンダは絶頂に達した女の頭部を呑み込んだ。

両手で女の裸身を口内に押し込んでいく。女は生きたまま呑み込まれながら絶叫していた。全身を震わせ、失禁した。あっという間にすべて呑み込まれた。アナコンダの腹部が大きく膨れ上がり、揺れ動いていた。

ピータが逝ったばかりの女を仰向けに横たえ、乳房に噛み付き根元から喰い千切った。

女の断末魔が広場に響き渡った。腹部を鋭い鉤爪で縦に切り裂き、血塗れの肝臓を取り出し、生のまま貪り喰らった。女は白目を剥いて、全身を震わせていた。

美咲が二十歳前くらいの女を地面に横たえ、女の乳房を揉みながら無心に膣口を舐めていた。

老人は別の若い女の口に萎びた男根を入れて、腰を動かしていた。

黒沢は牢獄の扉を押し開いた。牢獄前の広場は血の海

となっていた。数人の女達が手足を引き抜かれ、内臓を喰われた状態で地面に横たわっていた。

すぐ近くにはピータが地面で胡坐をかいて、引き抜いた女の足を持ち、太腿肉を生のまま食べていた。

アナコンダは三人目の女を尻から呑み込もうとしていた。女は何度も逝かされた後なのか、呆けたような表情をしていた。余りの恐怖に精神のたがが外れたのかも知れない。

美咲は女の背後に座り、首筋に喰らい付き鮮血を啜っていた。

牢獄の中に数人の女達が、震えている様子が垣間見えた。

第四章　人喰いモンスター

黒沢は、広場に足を踏み込み、対物ライフルのＸＭ五百の安全装置を外した。

花崗岩の絶壁に周囲を囲まれた広場に乾いた金属音が響いた。

哀れな犠牲者達を貪り喰らっていた四人の魔物達が、一斉に黒沢を見た。

「お前が黒沢という餓鬼か？」

ピータが食べていた女の腿を持ちながら立ち上がった。アナコンダも女を呑み込み終えて立ち上がった。老人と美咲は二人の影に隠れた。

「残りの女達を解放しろ」

「こんなに美味しい家畜を解放しろって。しかもお前は一人だ」

「この銃は、この世のあらゆる生物を瞬殺できる」

「弾が当たればだろう？」

ピータは女の片足を黒沢に向かって投げ付けた。それは時速数百キロで飛んできた。銃声が轟、空中で粉砕し

た。その隙にピータが黒沢目掛けてダッシュした。数歩で四つん這いになった。衣服が千切れ、一瞬で全身に体毛が生えた。

黒沢は、迫りくる狼男に変化したピータに向けて次弾を放った。ピータは、超音速の弾丸を避けるように体制を低くした。銃弾がピータの体毛を掠り剛毛が宙に舞った。

間髪を入れずに次弾を発射した。今度は目にも止まらぬ速さで横に飛んだ。

ピータは地面に落ちていた野球のボルほどの岩石を口で咥え黒沢に目掛け放り投げた。

銃弾の速度に達した岩石を黒沢は、銃身で受けた。大音響がして鋼鉄製の銃身が折れ、衝撃で背後の岩壁までに跳ね飛ばされた。黒沢は間髪を入れずに立ち上がった。口元に滲んだ血を手の甲でで拭い不敵な笑みを浮かべ

た。胸のフォルダーから、レイジングブル四五四カスールを引き抜き、突進して来るピータに向けて連射した。四発目がピータの肩を撃ち抜いた。

不死身の狼男も特殊炸薬入りの四五四カスールの衝撃には耐えられず、石畳の上を転がり、動かなくなった。黒沢は、三メートル先に横たわる巨大な狼に変化したピータの頭部に狙いを付けた。

引き金を引こうとした時、横からアナコンダの蛇のような舌が伸びて来て、片足に絡みつき、凄まじい力で引き寄せられた。黒沢は重心を崩しながら、アナコンダの顔面目掛け、銃弾を放った。アナコンダは寸前に顔面を鋼鉄製の腕輪を嵌めた手でガードした。

鋼鉄製の腕輪に着弾し、衝撃で千切れ飛んだ。アナコンダは衝撃で背後に倒れ込んだ。

黒沢は、素早い手付きでレイジングブルに銃弾を装填した。その時、背後から何者かの攻撃を受けた。背中を

激しく突かれ、前のめりに倒れた。地面に激突する寸前で反転し、受け身で衝撃を緩和させた。上から、致命傷を負った筈のピータが乗りかかって来た。巨大狼のままだった。

鋭い牙を打ち鳴らし、顔面を噛み裂こうとしてきた。黒沢は顔を左右に動かし、攻撃を躱しながら、ピータの脇に手を回し、体毛を掴み、右足を突き上げ巴投げを放った。

ピータの身体は十メートル以上跳ね飛ばされた。空中でバランスを取り、四つ足で着地した。

四五四カスール弾で破壊された筈の右肩は、再生し元に戻っていた。

背後から強烈な殺気を感じた。ピータに狙いを付けたまま、首を狙って飛んできたアナコンダの舌を左手で掴み、前に引っ張った。アナコンダがバランスを崩し、前のめりに突っ伏した。

「そこまでよ。龍一」

美咲が、全裸に剥かれた花梨を肩に担いで、広場に入って来た。花梨は意識を失っているようだった。

「彼女に何をした？」

「ただ、あそこを舐めまくって逝かせただけよ。さあ、銃を捨てなさい」

龍一は、手にしていたレイジングブルを地面に置いた。

その頃、ルーマニアのシビウ国際空港ロビーから一組のカップルが出て来た。

一人は痩せ型の東洋人の男で、三十代くらいの年齢に見えた。もうひとりは燃え上がる様な金髪でモデルのように美しい容姿をした二十代くらいの白人女性だった。

男はサングラスをかけ、黒革製のジャンパーとジーンズを履いていた。

女はベージュ色の革ジャンパーを着て、白い太腿丸出

しのホットパンツにブーツを履いていた。
二人とも大き目のリュックを背負っていた。
「龍一から連絡が途絶えた」
「奴らに捕まったのかしら」
男は龍一の叔父である黒沢修であり、女は修の恋人であるシャロン・キンバリーであった。
二人はタクシーを止めて乗り込んだ。

城の地下牢では、全裸に剥かれた黒沢が、鎖で両手両足を拘束され、天井から吊り下げられていた。黒沢の前では、美咲が片膝をついて、むき出しにした男根を美味しそうにしゃぶっていた。
「久しぶりだね。龍一のチ＊ポが一番だよ」
美咲はうっとりとした表情で鬼頭を舐め、アヌスを指先で刺激しながら激しく吸引した。
黒沢は歯を食い縛り、襲い掛かる快感に耐えていた。

我慢も限界だった。股間から湧き上がる快感に耐え切れず、美咲の口内に精液を迸らせた。

「美味しいよ。龍一。もっと飲ませてちょうだい」

美咲は射精し力を失った男根をゆっくりと扱き始めた。もう一方の手で睾丸を優しく揉み始めた。

再び、快感が戻って来た。美咲は屹立した男根を呑み込んだ。柔らかい舌で男根を舐め回した。

同じ地下牢の壁際に置かれたダブルベッドでは、人間の姿に戻ったピータが、全裸にむかれた花梨の白い太腿を押し広げ、膣口を舐っていた。花梨は何度も口で逝かされたようで半ば意識を失っていた。うつ伏せにしてアヌスに舌を入れ味わった。ピータはアヌスの味が気に入ったのか暫く貪るように舐めていた。

最後には、花梨の白い尻を抱き上げ、図太い男根を挿入し、快感を絞り上げるようにゆっくりと腰を前後左右に振り始めた。徐々に注送の速度を速めていく。花梨の

白い裸身が、木の葉のように揺れ動いた。

「喰いてえ！」

ピータは呻くように言ってすべてを膣内に放出した。

一階にある食堂では、老人とアナコンダが若い女達を食材とした食事を摂っていた。

既にひとりの女を呑み込んだ後なのか、腹部が大きく膨らみ、僅かに動いていた。

丸太のような両腕に全裸の美少女を抱え、今まさに呑み込もうとしていた。

燃え上がる様な金髪の美少女は、既に何度か逝かされたようで、半ば意識を失った状態だった。

一方、老人の方は、こちらも若くて美しい全裸の女を食卓テーブルに横たえ、首筋に喰らい付き、牙を突き立て、鮮血を啜っていた。その美少女は、既に息をしていなかった。虚ろな表情で天井を見上げていた。

「あの二人をどうするつもりだ？」

ピータが言った後で、美少女のものと思われる根元で切断された片足を持ち上げ、太腿肉に喰らい付いた。

「龍一の処分は私に任せて」

老人の膝に座っていたチャイナドレス姿の美咲が、老人の首に抱き付いた。

「花梨はアタイが喰らいたいよ」

アナコンダがのんびりとした口調で言いながら、テーブルの上に横たえていた美少女の裸身を持ち上げ、頭部から口内に押し込んでいく。金髪の美少女は意識を失っていて、何の反応も示さなかった。

四人は、古城の食堂で、夕食をとっていた。

「お前は龍一に執心のようだな？」

老人は皮肉めいた口調で言った。

「違うわよ。私は彼奴の精液が好きなの。搾り取ってから最後には全身の血液を吸い取ってやるわ」

「それを執心と言うのだよ」

「花梨をアナコンダに独り占めさせるのは気に喰わないな」

「独り占めなんてしないよ。アンタは散々に犯せばいいだろう」

「半分分けは、どうだ？俺が下半身を頂く」

「冗談じゃないよ。尻の肉が一番美味しいんだよ」

二人は立ち上がり、互いに睨み合った。今にも掴み合いを始めそうな雰囲気だった。アナコンダの口元からは美少女の白い片足がはみ出ていた。

「まあ、待て。お前達には龍一を倒した謝礼として、黄金の他に美少女を十人づつ与えよう。来週近くの村に二十人の女子大生を載せた観光バスが訪れる予定になっている」

「本当かい？」

「まあ、それなら文句はないな」

ピータとアナコンダは席に戻った。

「女子大生？それは私も初耳よ。私も楽しみたいわ」

美咲が甘えた声で言った。

「美女の国ウクライナから観光旅行に来ているということだ」

「楽しみだわ。きっと美味しいわよ」

「そうだね。アタイは若い姉ちゃんを踊り喰いにするよ」

「そうだな。脂が載った尻肉は堪らないぜ」

「では決まりのようだな。明日の晩に花梨は、ワシの夕食にする。美咲は龍一を嬲り殺しにする。二人は見物でもしていてくれ」

「どうやって喰うんだ？」

ピータが興味を示した。

「生き血を吸った後で、肛門から串を刺して丸焼きにしようと思う。味付けは塩胡椒のみだな」

老人が、満面の笑みを浮かべながら花梨の調理方法を説明した。

「そいつは美味そうだな。俺なら生のまま頂くが」

「私は龍一のチ＊ポを切り取って塩焼きにして食べるわよ」

美咲は老人の膝から下りて、出口に向かった。

「どこへ行く?」

老人が美咲の背中に声をかけた。

「明日処分するんなら、今日が最後になるわ。楽しまなくちゃ」

「俺も花梨を抱いておくよ」

ピータが美咲の後に続いた。

第五章　美少女の串刺し

へと続く。